

## 『仕事と日本人』

武田晴人著／筑摩書房

## 『肉食の思想—ヨーロッパ精神の再発見』

鯖田豊之著／中央公論新社

今の時代海外の工場で管理職として働く、又は上司が外国人となることも当たり前のことになりました。その際、特に注意して欲しい事があります。それぞれの国や地域によって「仕事」「働く」の意味が違う点です。古代ギリシャ人やローマ人は、手足を使って働くことは奴隷の仕事と考え、市民は国のあるべき姿を考え方向づけることが仕事であると考えていました。いわばガレー船の漕ぎ手と船長のような関係です。この流れがあって一般に欧米での労働の感覚は、「上流階級が嫌な事をやらせるために、一方労働者階級が生活の糧を得るために労働者が契約に基づいて労働力を提供し、対価としての賃金を受け取る」関係からスタートします。

これは、あくまでも欧米型の労働価値観であり、日本の伝統的思考とは大きく異なります。なぜそんな違いが出るのでしょうか？そもそもヨーロッパは基本的に放牧を中心とする生活、即ち勝手に生えてくる草を家畜に与え、ほとんど耕さず肥料も与えず草取りもしない三圃制を用いた農業では「個」の勝手な行動が許容できます。それに対して、東アジアは稲作が中心で、高湿度でどんどん草が生え、放置すれば収量が極端に落ち、隣の田圃に迷惑を与え、水を同時に引いてこないと集落全体の収量にも影響が出る農業であり、ヨーロッパ人に言わせれば（手間をかけているという意味で）園芸という評価なのです。遺伝子組み換えが農作業を楽にするとすれば、日本ほど抵抗なく受け入れられる背景であるのかもしれませんが。

人間生活の根幹である農業においてすら、「働く」、「協働作業」、「仕事」ひいては文化が異なるのは当然の帰結なのです。そういった下地から明治維新以降日本は急速に工業化を進めたのですが、農民から工業従事者へ転換する上で、高緯度地域での稲作農業の下地が優位に働いたことは容易に想像できるでしょう。その一方で、1日単位で働く農業から分・秒単位で調整を取る必要がある工業に合わせるために時間に関する考え方も大きく変化しました。

このように歴史的な変遷を経て現在があり、今我々が当たり前と思っている時

---

間、労働倫理が出来上がっているのです。相手文化の背景を知らないで日本を押し付けることは、彼らにとって植民地主義者の再来になってしまいます。この本は、なぜ日本人の感覚が通用しないかを知るきっかけになるとと思います。

## 執筆者紹介

### 綿引 宣道

経営情報系准教授。専門領域は、経営学、経営社会学。

---

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格  
『肉食の思想：ヨーロッパ精神の再発見』 鯖田豊之著 中央公論新社（中公新書）  
1966年 735円  
『仕事と日本人』 武田晴人著 筑摩書房（ちくま新書） 2008年 903円

[ブックガイド目次へ](#)